

---

# 僕と紗江ちゃんとらぶらぶキャンプ！

まなつか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と紗江ちゃんで「りづりづキャンプ」！

### 【ノード】

N7174X

### 【作者名】

まなか

### 【あらすじ】

祝 アマガミSS一期！ を記念して書いた「僕と逢との一泊二日」とは別の小説です。紗江ちゃんをヒロインとして迎えたこの作品はやはり前作同様「お泊まり」というところです。さてさて、偉大なる「橘さん」は山でなにをしてくれるのであるつか？

## 第1話「始まり」

「ん~っ、やつぱり空気が違うね」

僕は大きな伸びをしながら隣にいる紗江ちゃんに言ひ。

「そうですね……あつ、先輩！ 小鳥たちがたくさん……」

僕は紗江ちゃんの指さした方向をみる。小鳥がたくさん山の方へと向かつて行つていた。

「本當だ、たくさんいるね」

「いいなあ……私も空が自由に飛べたらいいのに……」

「紗江ちゃんなら飛べるさー！」

「えつ……そんな……でも、飛べそうな感じがしますね」

はははっ、冗談を本氣にするなんてかわいいなあ。

僕と紗江ちゃんは輝日東山にキャンプに来た。あのクリスマスから半年。そう、あれは一週間ほど前のことだった。

「先輩……あの、今度遠足があるんですけど……」

「あ、ああ、僕も去年行つたな……。輝日南山だっけ」

「は、はい。そうなんですけど……あの、私体力がなくつてみんなに迷惑をかけないか心配で……」

「あ、それなら」

ん、待て。輝日南山は結構緩やかでルートは短いはずだ。これは美也からも聞いているから紗江ちゃんも知つてているはず。それなのになんで僕に相談なんて……？

「先輩……？」

いや、これはただ相談しているんじゃない。僕 つまり、教官に特訓をしてくださいと言つてこようのじやないか！

「紗江ちゃん！」

僕は紗江ちゃんの肩をがしつと掴んだ。

「はい！」

## 「一緒にキャンプに行こう!」

「は、はい……？！」

驚いた表情を見せる。あれ……違つたかな。

「一緒に特訓しよう！」

「えー、つと……え？」  
わ、私と先輩とで泊まりでキャンプするんで

すか？

「ちいだねー。」

「ええええ――――――!? と、泊まり……泊まり……泊まり……」

紗江ちゃんは口の中ですりと「泊まり……」とつぶやいている

「……わ、かりました。お父さんとお母さん」訊いてから」します

「よし、決まりだ！」

とその後にいろいろあつて今に至る。

キャンプの用具は梅原のお兄さんから借りてきた。

卷之二

卷之二十一

僕たちは青空に向かって拳を突き上げた。

## 第1話「始まつ」（後書き）

こんじひは、まなつかです。

また新たに連載小説に手を出してしまいましたが……更新がきつい……。

受験生ですので、おそらく更新は週に一回。水曜日の午前0時になるかと思います。

塾の帰りに執筆をしていますので。

僕はどちらかといつと曰乳ではなく、貧乳派です。  
最高です。【冗談です。  
いいんですよ、胸なんて。可愛いつやいいんですよ。

わーえちーん

それでは。

## 第2話「先輩、トイレ行きたいです」

「紗江ちゃん、見てよ」

「わあ……すごいです。こんなにも落ち葉が積もりますねー」

普段街の方で暮らしている僕たちにとってそれはすごいことだった。一步步くじとにサクサクという感触がなんともいえない。

「大丈夫? 鞄、重くない?」

「は、はい。大丈夫です」

紗江ちゃんのリュックサックには一日分の食料が入っている。缶詰をはじめ、米やお菓子なども入っている。ちなみに僕の鞄にはテントや飯ごう炊さんの道具、そのほかいろいろな物が入っている。正直かなりきつい。

「それじゃあ、行こうつか」

「はい」

そしてしばらく歩く。景色はあまり変わらず綺麗な赤や黄色の葉が風によつてちらちらと舞つていた。

「先輩……あの……」

「ん?」

紗江ちゃんが顔を赤らめてもじもじしている。

「その……えつと……」

「どうしたの?」

「と、トイレが……したいです」

「ええつー?」

「や、山で! ト・イ・レ! ?

「で、ですか……その……ちょっと失礼しますー。」

「ああっー。」

紗江ちゃんはほことリュックサックを放り投げると道からはずれ

た方へと行つてしまつた。

「なんてことだ……」

聞こえるぞ。

き、こ、え、る……！

「聞かないでくださいあああい……！」

よほど我慢していたようだ。

至福？ の一時を過ごせた。ははつ、いいじゃないか！ ハイキ

ング最高！

僕は木々の隙間から見える蒼い空を仰ぎながら一人、にやついていた。

## 第2話「先輩、トイレ行きたいです」（後書き）

こんにちわ。まなつかです。

なんか最近めっちゃ疲れてますん。

更新速度は相変わらず週一回で行かせていただきます。

それでは。

### 第3話「紗江ちゃん、やまじこじるを（ゝゝ）」

「ああ、行こつか」

「はい……」

紗江ちゃんは流石に先ほどのことで頬をやべりたまのようになにに赤く染めていた。

「ところで先輩」

「ん？」

「目的地はどこなんですか？」

「ああ、それね。どつか泊まれそつなといふがあつたらそれでキャンプをする予定」

「だ、大丈夫なんですか？」

「はははっ！ 大丈夫大丈夫！ ほら、僕の友達の梅原」

その梅原という言葉を聞いたとたん彼女はさらに顔を赤くした。……なにを想像しているのだろうか。

「あいつが昔この山でキャンプをしたことがあるやつだよ」

「だ、誰ですか！？」

「え……いや、梅原のお兄さんとだつてや……」

言つてからしまつたと後悔する。

彼女は完全に自分の世界に入つてしまつたからだ。

「やや、そういうやましいことはなくつてや……ふつうこ

「なにを言つているんですか！ 私は何もやうじことなんてこれっぽっちも考えていませんよー。」

「い、ごめんよ……」

「あ、すこません……私の方こそ」

「…………」

しばし気持ちの悪い沈黙の時間が流れ。お互に何か雰囲気を明

るくしょりと辺りを見回すが

「「あ」」

二人の声が重なる。

視線も同じところに向いていた。

### 第3話「紗江ちゃん、やめじこじを（ゝゝ）（後編）

こんなに恥ずか、まなつかです。

今日学校で置き勉チエックがあるのを知っていたにも関わらず、重いので置き勉をしてしまいました。最悪です。眠れません。学校の教科書つて正直役にたたな（ゝゝ）つちの県だけかもしれませんね。

まあでも30円近くはちよつと多いですよね。限度つてこいつものあります。

……ああ、心配だ。  
小心者なのでそれでは。

## 第4話「熊だ」（前書き）

更新が数時間遅れました。すいません。

## 第4話「熊だ」

「熊……だよね」

僕は自分でも驚くくらいのふるえた声で隣でそれ以上に震えている紗江ちゃんに言つ。

「そそそそうですよね」

一瞬紗江ちゃんを確認すると顔が真っ青だった。

「どうい、どういよつー」

やつぱつこりの季節、熊がよく出没するよな。ビーリーヨウ、やばい。やばすぎる。

「死んだ振りですよー！」

「そうだ！ それだ！」

僕はキャンプ用のナイフを取り出す。そして思い切り腹に刺そうとして……。

あれ。

「先輩！ 死んじやいやです！」

「つづわわ」

どうしよう、気が動転して自分でも訳の分からない」と落着け……。

梅原はなんて言つていたか……思い出せ。

『あ、もし熊が出たら何が何でも彼女を守つてやれよ。命に代えてでも』

わかった。具体性は無いが今の僕には十分だ。

熊の餌食になる  
おとつになる

熊より先に紗江ちゃんを襲つ

「くーまーーん」「ーひーーー！」

そう叫んで紗江ちゃんを突き飛ばし、走り出す。紗江ちゃんは驚いて動けないはずだ。

「こーっちはおーいで！」

挑発するように服を脱ぐ。すぐに反応してこっちは走ってきた。

……速いぞ。

「こーっちはだよーん」

山を縦横無尽に駆け巡る……予定だつたが

「伏せろー！」

誰かの叫び声がして銃声が響きわたる。僕はひととに転ぶよひに伏せた。

訪れる静寂。鳥さえもすべて時間が止まったように静かになった。

「大丈夫か！？」

## 第5話「危機一髪」

「大丈夫か！？」

それは男の声だった。僕はかなりの数の衣類を脱いでいたので体中擦り傷だけでひりひり痛かった。

「せーんぱーい！」

紗江ちゃんの震えた声が聞こえる。そして枯れ葉をかさかさと踏む音がして

「先輩！」「た、橘！」

二人の声が重なった。

僕はむくりと顔だけ起こす。

「梅原のお兄さん！」

「久しぶりだな。はは、まさか熊におっかけられているとはな。」

「この子はカノジョかい？」

「ええ、そうです」

「守つてやろうとしてたんだな」

「はい！」

「先輩！」

突然柔らかい感じと共に身体が軽くなる。紗江ちゃんが起きてしてくれたのだ。

「よかったです、無事で……」

「ありがとう」

僕らはそつと口づけをした。

「お、お、俺は……何もみてないからな！ そ、そんじやこの熊はもうつてくからー。じゃ、じゃあなあ」

「はい！ ありがとうございました！」

「おう、またな！」

彼は銃を担ぐと帰つて行つた。獵でもしてくるのだらうか。

「先輩、私のためにありがとうございました」「はははっ、ちょっとかっこわるかつたけどね」「そんなことないですー。」

「ありがと、紗江」

ぎゅっと抱きしめる。紗江の温もりが

僕は服を着ていなーことに気づき、急いで集めてきた。

「さあ！ 頂上を目指してひと頑張りだ！ 行くぞ！」  
「はー！」

今度はじっかりと手を握つてはぐれなーようにした。顔を見合わせてにっこりと彼女は笑つた。

## 第5話「危機一髪」（後書き）

感想などありましたら、お気軽に。

## 第6話「山頂にて」

山の空気がやつぱり変わつてゐる。

そう思つてゐるのは僕だけではない、隣にいる大切な人もおもつてゐると思つと嬉しさが増した。

「紗江ちゃん」

「おなか減つちゃいましたね」

「へつ！？」

心は通じなかつたようだ。

「あ、まだ減つていませんか？」

時計を見ると午後2時だつた。なんやかんやでこんなに時が経つていたとは。

「そうだね、お皿にしようか」

「はい！」

適当な場所を探すとすぐ近くに岩があつた。一人くらい座れそうな岩だ。

「ここで食べよひ」

座つてみると皿の前に広がつた景色に思わず息を呑んでしまつた。

いつもの風景。同じ場所。あのファミレス、海、学校……

何もかもが違つて見える。

輝いて見える！

「わあ……素敵な場所ですね」

やつとわかつてくれた！

「鳥さんになつた気分です」

「やつだよね。これだけ高いと輝日東が全部見渡せちゃつよ

吹いてくる風が心地良い。

耳を澄ますと後方から美しい鳥の鳴き声。

落ち葉がひらひらと舞っている。

「せーんぱい、食べましょー!」

隣には柔らかな笑顔を浮かべている一人の少女。

「やうだね、食べよウカ

僕らは紗江ちゃんが作ってくれたサンドイッチを食べる。いろいろあつたために潰れてしまつていたがそこに込められた愛情は変わらない。

「私が作ったんです

「うん! おいしいよー!」

僕は急にお腹が減つてきて無我夢中でそれを畳袋の中へと放り込む。

「先輩、マヨネーズ、つけてますよ」

「えつー? 本当ー? ビービー?...」

あわてて顔を拭おうとしたその時、紗江ちゃんがぐっと顔を近づけ

「いい感じだよ

「え?...」

な、なんなんだあの「ちゅー」つていう擬音が最もよく似合つてしまうあの感触は! そして頬に感じたあのなんとも言えないざらりとした感触、温かさ!

「や、紗江ちゃんー?」

「えへへ……一度やつてみたかったんです。本当はついていませんでした」

可愛らしくほほえむ。

心の中がほわっと温かい感じに包まれた。

僕は、今！ 幸せだ！

ここから輝日東に向かつて思い切り叫びたいような気分だった。

## 第6話「コロナ」（後編）

こんばんは、まなつかです。

最近本当に寒くなりました。  
テストも近く、受験も近くなつてきました。  
全国の受験生さん、がんばりましょう。  
それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7174x/>

---

僕と紗江ちゃんとらぶらぶキャンプ！

2011年11月23日06時50分発行